

グローバル・スチューデント・コラボレーション(GLOSCOL)ネットワーク創成

創立80周年:大阪大学は“元気が一番”の“学生が主役”

随 筆

久保井亮一*

Creation of Global Student Collaboration (GLOSCOL) Network

Key Words : Global Student Network Sigma Cross-Over-Cultures

大阪大学は、そして、その中でも“異文化の融合によって新たな人間文化を創造する”ことを目指す基礎工は“元気が一番”の“学生が主役”であると、小生は常々主張してきた。そうでなければ、例えば基礎工の留学生相談室だよりも、また留学生センターや各部局の報告に、毎年満載されているような、学生たちが主役の多彩な活動報告などできるはずもない。元気がなければ、異文化・異言語の障壁を越えて交流などできないであろうし、また異なる文化・歴史を背景とする若い学生たちの自由闊達な交流の中でこそ、“地域に生き世界に伸びる”大阪大学の、新たな、そしてグローバルな、人間文化の融合と創出の歴史が生み出されていくのであろう。

以下に、小生の知る範囲での、幾つかの学生による国際交流活動の実例を示し、これらの実績に基づいて、来る2011年の創立80周年を祝うべく、新生大阪大学の国際交流・人材育成事業として、学生を主役とする阪大「グローバル・スチューデント・コラボレーション(GLOSCOL)ネットワークの創成」を提案したい。

思えば、20世紀末に日蘭交流事業でデルフト工科大学から学生代表団が来ると聞けば、基礎工・工学部等の学生たちが、直ちに、大阪大学学生代表団を組織して、学生交流会や各種イベントを企画・開

催して学生交流の歴史を開いている。

また、大阪大学創立70周年記念事業の一環として、基礎工学部より提案して採択された学生主体の国際交流プログラム「阪大学生代表団の海外派遣」事業がスタートし、学生派遣団(3チーム、各200万円)を募集すると聞けば、全学から学部・学年・国籍・性別を越えた多彩なメンバーからなる70近くのチームが結成され、シグマホール等で元気一杯のパフォーマンス/プレゼンテーションが繰り広げられた。

その激戦を勝ち抜いて選ばれたあるチームは、アジアの環境問題と日本企業の関わりについて、タイの学生や現場の住民たちと対話を続け、その実像がいかにも思い込みや既成の情報と違っているかを報告した。別のチームは、スイスETHにおける科学技術倫理教育と、ヨーロッパにおける科学技術者間/科学技術者・市民間のコンセンサス会議方式による対話について調査・実践し、また別のチームはUCLAと吹田キャンパスで音楽を通しての普遍的コミュニケーションを証明すべく奮闘し、多くの一般参加者に感動的な体験を残した。このように、採用された3チームも素晴らしいが、残念ながら採用されなかった多くのチームの企画も、筆者を含めて各学部から選抜された審査員が、是非その実践結果を見てみたいと思えるものであった。

その結果、規模は縮小されたが(2チーム、各100万円)阪大後援会が、この事業を引き継いで毎年実施している。そのおかげで、毎年細々ながら選抜された元気が一番の学生チームが、阪大が学術交流協定を締結している相手校を訪問して、学生・教職員・市民との多彩な交流を繰り広げてきた。

また、基礎工留学生相談室を舞台に、シグマ留学生会が日本人メンバーを募集すると、少ないながらも選りすぐりの元気な学生たちが副会長やスタッフ



*Ryoichi KUBOI

1946年2月生
大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻(1974年)
現在、大阪大学大学院基礎工学研究科物質創成専攻 化学工学領域 教授
工学博士 生物機能材料設計学・Membranomics
TEL : 06-6850-6285
FAX : 06-6850-6285
E-mail : kuboi@cheng.es.osaka-u.ac.jp

に参画して、留学生相談室で各国留学生メンバーと一緒に定期的に会議を開き、さまざまな活動実績をあげてきた。

米国のピッツバーグ大学が洋上大学プログラムの交流先を求めていると聞けば、地元ボランティア・ホストファミリーたちにも協力を呼びかけて、大阪大学の国際交流プログラムのPR、研究実績の紹介から適塾訪問までの交流プログラムを提案し、米国の学生や家族を持続的に受け入れてきた。

また、基礎工未来研究ラボプロジェクトがスタートするや、国際学生ネットワーク活動の募集が始まるのを待ち兼ねたかのように、若者らしい企画が次々と提案・採用され、いずれも目覚ましい実績をあげてきた。

ある学生たちは、基礎工の英語コースのあり方を学生の目から先行調査すべく、ヨーロッパにおける非母国語としての英語による講義法の体験調査・研究(テーマ:英語での授業を最大限活用しよう)を提案実行した。またベトナム・タイとの教育・学生交流が始まるや、学生チームによるベトナム訪問・留学勧誘(テーマ:ベトナムと日本に学生交流の橋をかけよう)や、基礎工国際交流委員会のミッションの一員として、ベトナム・タイ各大学でのシグマ学術交流セミナーの一翼を担い(テーマ:情報・バイオ工学に関する学生交流セミナー、発展下にあるタイに学ぶ学力問題の実態と解決の糸口他)さらには全国・全学のベトナム留学生や日本在住ベトナム市民にも呼びかけて、ベトナム-日本学生学術交流会議(VJSE会議)を立上げて、最初の2回を阪大(基礎工)で、第3回を神戸大学で、また第4回は本年(2008年)京都大学で開催すべく、主体的に活動している。

一昨年の、大阪大学タイ・バンコクセンター開所式・記念式典・国際シンポジウムでは、阪大側の発表者の一員として、学生チーム代表2名(シグマ留学生会代表・副代表:タイ留学生、日本人学生)が、それぞれタイにおける教育調査活動成果報告、および第1回タイ-日本学生学術文化交流会議(TJSE会議)の趣旨説明と参加の呼びかけを行っている。第2回TJSE会議は、日タイ友好120周年と人間と科学技術のサステナビリティをテーマとする学生主体の国際交流となり、タイ留学生会を中心にシグ

マ留学生会・日本人学生が協力して、総長・タイ領事や全学・JICA・GLOCOL等の支援を得て、シグマホール・銀杏会館で盛大に実施された。

米国への夏季語学研修と併せて企画・提案・採用されたシグマ未来ラボ派遣チームは、日米大学院生における就職の価値観の違いについて、環境問題・安全保障の意識調査等々を元気一杯に実施している。

一方、基礎工化学工学コースでは、各研究室の学生代表からなる学生懇話会組織があり、この学生チームが、米国政府(NSF)が毎年派遣するREU生(3ヶ月の基礎工卒業研究体験留学生)数名と日米学生チームを組み、日常の各研究室での異文化体験の支援や企業・他大学訪問から、英語コロキウム(最終研究発表会)の開催までを実施してきた。

最近では、新入生から総長にあてた環境問題に対する全阪大での取り組みを訴える手紙、留学生・日本人学生による、自発的なミャンマー・中国被災者救援ボランティア活動、TA交流会議や学生国際交流団体代表者会議の提案等々がある。

このように大阪大学では、学生・院生・留学生主体の国際交流活動の実績は、枚挙に暇ない。これらの学生提案は、大学側の経済的・場所的・人的支援も必要であるが、本来、主役である学生たち自身によって、責任を持って吟味・選択され、実践されるべきと考える。

そこで、例えばGLOCOLセンター内に学生支援のための専属スタッフを配置し、上述のシグマ留学生会や化工の学生懇話会組織、欧米の学生団体ユニオン等を参考として、学生による学生のための支援組織、海外拠点も含めたオール阪大組織として、グローバル・学生・コラボレーション(GLOSCOL)ネットワークを立ち上げることを提案したい。このGLOSCOLネットワークによって、GLOCOLセンターやJICA、大阪大学の世界3拠点の協力のもと、2011年には、世界の協定校から学生代表団を受け入れ、またこれまでの阪大の派遣した優秀チームを結集し、VJSE/TJSE会議や、世界/環太平洋学生学術文化交流会議の開催を支援し、全学の学生主導コンペ実施、各種プロジェクトの選抜・実施を裏方として支援することを提案したい。

誌面を借りて、大阪大学は、“元気が一番”の“学生が主役”との輝かしい歴史と伝統を築いてきた歴代留学生会メンバー・日本人メンバー・OB/OG会メンバー・役員・教職員・関係の方々へ、心よりの讃辞を送りたい。小生も、シグマ留学生相談室・国際交流委員会OBとして、後輩たちの活躍が誇らしく、また自分のことのように嬉しく思っております。

また、先輩たちから栄光のバトンを受け継いだ新留学生会メンバーの諸君、創立80年・50年の節目から、次の100周年・70周年に向かう佳節に、創立の原点に回帰するとともに、そこから新たな良き伝統の誕生を期待したい。最後に故山村雄一阪大総長が大阪大学50周年史の序文に書かれていた言葉を紹介したいと思います。

「大阪大学の伝統といい、歴史といっても、それらは所詮「人」によってつくられ、「人」によって伝えられていくものである。しかも単なる伝承は伝統ではない。伝統には創造を伴わなければならない。50年に及ぶ我が大阪大学の歴史と伝統の上に、さらにその継承と創造的發展につとめ、・・・国際的に高く評価される大学をつくりあげたいものである。・・・」即ち、最も大切なものは「人」(人材)である。良き「伝統」は「人」によってしかつくられず、また「人」も「人」によってしかつくられな

い。良き伝統は、先輩たちのこれまでの成果に甘えず、先輩たちを越える新たな目標を設定し共有し、絶えざる挑戦と応戦の中で、創造の努力を持続する中でこそ、生まれ、継承発展していく。このことをさらに深く銘記し、新たな目標に向かって挑戦と応戦の努力を開始して行きましょう。

さあ、これからです。常に元気が一番の学生たちとともに、日々に新たに、また日に新たに、常にいよいよこれからの気持ちで、新たな人材を育成し、更に大きな、高い目標に向かって全員で挑戦していきたいと思います。「夢みて行い考えて祈る」、中でも「夢みて行う」事が大切だ、また新たな文化を創造する「卒業生を見てください」との故山村雄一先生・正田建次郎先生の言葉を胸において。

最後に、ただでさえ忙しい中で学生たちのために貴重な時間とエネルギーを割き、折々に支援・叱咤・激励していただいた方々に、学生たち共々に心よりお礼申し上げます。

今後とも“元気が一番”の学生たちへの厳しくも暖かいご指導ご鞭撻をどうぞよろしくお願い申し上げます。

讃えてもなお余りある夏木立(亮)

